



『ふるさととは遠きにありて思ふもの』

南帷子小学校長 堀田 誠

4月のある日に「グラウンドに誰かいる」と報告を受けました。職員室の窓から確認してみると、外国籍らしい男性と中学生ぐらいの子どもが鉄棒の近くにいました。さっそく確認に行きました。しばらく職員玄関前でその様子を見てみると、一緒にいた日本人らしい女性が話しかけてきました。「すみません。よろしいでしょうか。」「実は、この学校の卒業生で、あまりにも懐かしいので、きました。」と話されました。話を聞いているうちに、この女性は、開校間もない頃に南帷子小を卒業し、その後、ドイツ人の方と国際結婚され、2人の子どもを授かったそうです。現在は、ドイツに住んでみえ、この春、数十年ぶりに日本に来たそうです。お母さんの故郷を子どもや夫に教えたいと、わざわざ東京から可児市まで来たそうです。そして、「ここがママの故郷だよ」と中学生、高校生の娘に語っていました。室生犀星の詩「小景異情」に『ふるさととは遠きにありて思ふもの』という有名な行があります。長年ドイツという遠く離れたところから故郷を思い浮かべていましたが、久しぶりの故郷の情景に「わんぱく山、懐かしい。」、グリーン広場を見て「あの木陰で遊んでいたことを覚えていません。」、過去のアルバムを見て、「そういえばジャングルジムでみんなと写真をとった。」、幼き頃の自分を見つけて、「これがママだよ」と娘に話していました。別れ際に「来てよかったです。本当にありがとうございました。」と言って帰られました。もしかしたらこれが最後の日本かもしれない一人の卒業生が、素晴らしい思い出を持ち帰ることができて、本当によかったなと思いました。



紫陽花が満開です

南帷子小の廊下掲示には、わんぱく山活動のパネルが展示されています。かつては、「入山式」が毎年行われ、そして、青空・昼休みの時間も山に入って遊んでいたそうです。現在は、安全上の面から、限られた時間しか入ることができません。今は、5年生が総合的な学習の時間を使って、毎年、自分たちで考えた遊具を作成し、そして卒業時にその遊具を解体します。幸い、岐阜県立森林文化アカデミーの萩原ナバ裕作さんのご指導のもと、今年度も、わんぱく山の活動は展開されています。昨年度から、かつて幼き頃にわんぱく山で育った保護者が集い、定期的にわんぱく山の会を行うようになりました。希望者を募ったところ、多くの賛同者があったそうです。

教頭を行っていた頃、「道路で遊んでいる子がいる。何とかしろ。」「公園でサッカーをしている子がいる。何とかしろ。」という苦情の電話をいただきました。考えてみれば、現在の子は遊ぶ場所もないです。小学校の頃、田んぼで野球をやったり、竹やぶに入り秘密基地をつくったりして遊んでいた故郷を思い出します。放課後、わんぱく山と書かれたコンクリートの壁をバックネット代わりに夢中になって三角ベースを毎日のようにやっている子どもの姿をみます。きっとこの子たちも、数十年後に「ここで毎日のように野球をやっていたな。」と懐かしく思うでしょう。「ふるさととは遠きにありて思ふもの」の「遠き」とは、場所だけでなく時間も差すのかなと勝手に思いました。